ある日のスーパーで

「わあ。いっぱいだね。なかなか、車を止めるところがないよ。」

今日は日曜日、ふみかは、お父さんと買い物にきています。でも、駐車場はいっぱいでなかなか車を止めるところはありません。

「あっ、お父さん、あいてるよ。それもエレベーターの近く。」

「本当だ。でもだめだよ、あそこは。」

「どうして？」

「よく見てごらん、車椅子のマークがついているだろう。あそこは障害のある人たちのためのスペースなんだよ。」

ふみかたちが車を止めたのは、入り口からずいぶんはなれたところでした。

店内に入ろうとしたとき、さっきの駐車スペースに１台の車が止まりました。運転せきから１人の男の人が車椅子にうつろうとしています。ふみかは近寄って、車椅子が動かないようにと手をさし出しました。

けれども、

「１人でできるから、さわらないで。」

と、その男の人にことわられてしまいました。

（せっかく、手つだってあげようと思ったのに・・・）不満げなふみかの前で、その男の人は、エレベーター室の前の段差もかるく乗りこえてエレベーターに乗っていきました。

「もう、ずいぶん車椅子になれている人みたいだね。ふみかがさわって車椅子が動くのがこわかったんじゃないかな。」

お父さんがなぐさめてくれました。

ふみかが買い物をしていると、さっきの男の人がちんれつだなの上の方を

見てしまったような顔をしていました。とぼとぼ、きょろきょろあたりを見回しています。

(品物がとれないんだ。店員さんもいないみたいだし・・・。手つだってあげようかな・・・。でも、またことわられるかもしれないし・・・。)

ふみかは声をかけようかどうかまよってしまいました。

しばらく男の人を見ていたふみかは、思いきって

「どうしたんですか。お手つだいしましょうか。」と声をかけました。

「ありがとう。あの上のシャンプーがほしいんですが、取っていただけませんか。」

シャンプーを手わたすと、男の人は、

「本当にありがとう、さっきの女の子だね。おじさんは車椅子を使うようになって、できることはとにかく一人でやることに決めているんだよ。でもどうしても自分一人でできないこともあるんだよ。本当にありがとう。声をかけてくれてうれしかったよ。」

と、にっこりしてくれました。